

2025年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・社会人特別選抜) 問題

筆記試験 日本文学 専攻分野

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

2025年度

成	
績	

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・社会人特別選抜) 問題

専門科目 (日本文学 専攻分野)

(注意事項) ① 第一問の解答は、答案紙二十行程度を標準とする。

② 第二問 1 から 5 までの解答は、それぞれ答案紙八行程度を標準とする。

③ 第五問の解答は、答案紙十七行程度を標準とする。

④ 第一問から第五問まで、すべて縦書きで解答すること。

一、文学研究の意義とは何かについて、自身の見解を丁寧に述べるとともに、大学院で行う予定の自身の研究のテーマ、目的、方法をできるだけ具体的に説明しなさい。

二、次の事項について説明しなさい。

1 『万葉集』の作者層と詠風

2 斎王(斎宮・斎院)と文学

3 藤原俊成

4 仮名草子

5 無頼派

三、次の和歌を翻字し、口語訳しなさい。

いねくら 舟は 浪の せまき 舟に
あふく 舟は 浪の せまき 舟に

四、次の文章の全文を、表現内容がよくわかるように丁寧な口語訳しなさい。

そもそも、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、およそ洞庭、西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたたふ。島々の数を尽くして、そばだつものは天を指さし、ふすものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重に畳みて、左にわかれ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、児孫愛すがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉、汐風に吹きたわめて、屈曲おのづからためたるがごとし。其の気色、窅然として、美人の顔を粧ふ。千早振る神の昔、大山祇のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を尽くさむ。

『おくのほそ道』より

五、 次の文章は、志賀直哉「真鶴」まなづる（『中央公論』、大正九年九月）の冒頭部である。この小説を読み解く上で重要なポイントとなり得ると考えられる事項（モチーフ）と表現・語りの特性について、本文の記述を抜き出しながら説明せよ。なお、複数の事項（モチーフ）や表現等を取り上げてもよい。

著作権の都合上、この部分をご覧いただけません。

受験記号番号

7 / 7

以上